

本書は、シンボリック相互作用論の視点から、フェイスおよびフェイスワークを日本語学習者間の相互作用の事例を通して検証し、相互作用におけるフェイスおよびフェイスワークの機能に関する新しい理論を構築していくことを目的とする。

フェイスは、日本語では「面子」と訳されることが多いが、その定義は複雑で多岐にわたっている。そこで、本書では様々な研究における定義を踏まえ、フェイスを「ある環境の中で、獲得または回避したい自己像」と定義することとする<sup>[1]</sup>。

コミュニケーションは私たちが生きていく上で必要不可欠なものである。私たちはコミュニケーションによって心地よさを覚えることもあれば、反対に不快感または葛藤を覚えることもある。Ting-Toomey (2005) は、私たちが葛藤とどう関わっていくか、それはコンフリクトゴールによって変わってくると述べている。過去におけるコンフリクトに関する研究は、実際に直面している実質的な問題 (substantive issues) そのものの解決に焦点がおかれることが多く、当事者間の関係 (relational issues) やフェイス (face issues) 、アイデンティティイメージへの関心 (identity image concerns via facework)<sup>[2]</sup> にはあまり視点が向けられてこなかった (Oetzel et al., 2000)。

しかし、Brown (1977) をはじめとするいくつかの研究 (Ting-Toomey & Cole, 1990; Ting-Toomey & Oetzel, 2002; Ting-Toomey, 2005) では、評判、プライド、尊厳、フェイスに関する検討を抜きにして、実質的な問題を解決することは難しいのではないかと論じられている。例えば、Wilmot & Hocker (2001) はコンフリクト解決のゴールとして、内容、関係性、アイデンティティ、プロセスの四つを提示している。同氏 (2001) によれば、内容ゴールはまさに今表面にあらわれている問題そのもの、関係ゴールは当事者間の関係 (お互いを関係的にどう位置付けているか)、アイデンティティゴールは自らのアイデンティティの保護、プロセスゴールはコンフリクトに対するコミュニケーションプロセスにそれぞれ注目したゴールであり、これらは重複することもあれば、シフトすることもあるという。

Ting-Toomey & Oetzel (2002) は、フェイスワークは実質的なゴール、関係ゴール、アイデンティティゴールのマネジメントを包括したものであると捉えている。そして、フェイスワークをコンフリクトの解決に際し副次的なゴールとして扱うのではなく、他のゴールと同様に焦点を当てるべきである (Oetzel et al.: 2000, 2001) と述べている。さらに、

アイデンティティゴールは、文化および個人における信念や価値観と強いつながりがあるため、文化を背景としたフェイス指向の要素と密接な関連があるだけでなく、フェイスの保護や尊重と直接的に結びついている (Ting-Toomey, 2004, 2005)。以上のことから、フェイスおよびフェイスワーク研究の重要性が今後ますます高まっていくことが予想される。事実、これらの研究は国際政治経済学をはじめ社会科学系のあらゆる分野において必要不可欠となってくるであろう。

フェイスおよびフェイスワークの従来の研究には、個人の社会的属性や文化的次元を独立変数として検証を試みているものが多い。例えば、末田 (1998) は中国人学生と日本人学生における「面子」<sup>[3]</sup>の研究の中で、中国人は日本人に比べ、個人の能力の評価、日本人は中国人に比べ、処遇<sup>[4]</sup>に関わることに面子の意識を強く感じるということを検証した。繁栞 (2007) は、日本人、中国人、韓国人を対象とし、ネガティブフィードバックに対し受け手がどの程度フェイスへの脅威を感じるかについての比較調査を行った。その結果、日本人は対人的側面 (関係が強まらない、自分が他者の目に悪く映ること) に対して、中国人はネガティブフィードバックの正当性のなさや自分に対する他者の態度 (失礼、無礼な態度) に対して、韓国人は特にネガティブフェイス (主体性や権利を奪われること) に対して強くフェイスへの脅威を感じるという文化差を明らかにした。さらに、権力格差、男性らしさ―女性らしさといった変数とフェイスワークストラテジー (協力的ストラテジー、間接的ストラテジー、直接的ストラテジー) の関わりを解明を試みた研究 (Metkin, 2005, 2006) もある。

確かに、これらのような「実証主義的アプローチ」<sup>[4]</sup>による研究は、フェイスの傾向をマクロの視点から捉えたという点において、フェイスの解明に多大な貢献を果たしているといえよう。しかし、それらには身近な他者との関

係をどのように解釈しているのか、つまり個人と他者あるいは集団との相互作用という視点が含まれていない。また、社会的属性や文化的次元が常にフェイスワークの要因として意識されているとは限らない。実際、個人の社会的属性や文化的次元による差異自体、本人を取り囲む環境との相互作用によって生じたものであると言っても過言ではないだろう。佐藤 (2007) は、異文化間教育における相互作用および相互変容について以下のように語っている。

異文化間教育においては、あらかじめ一定の枠を前提にするのではなく、相互作用を通してその枠自体が構築されたり、再生産されたりする過程やメカニズムを明らかにすることに主眼をおくようになっていく。つまり、様々な現象を1つのカテゴリー (文化、民族等) で説明してしまうのではなく、個別的な文脈を通して、諸々の事象や現象を把握するようになってきたのである。また相互作用・相互変容に注目することは、異文化と自文化の二項対立的なとらえ方から脱却していくことにもなっている。 (佐藤 2007:52)

筆者は、相互作用により形成された何らかの要素がフェイスワークに影響を与える可能性があるのではないかと考える。反対に、フェイスワークそのものがそれら要素の形成に影響を与えるといったことも考えられるだろう。

さらに、「相互作用は重要である」「相互作用が行われている」といった言葉をもって結論としている研究は多いが、そこでどのような相互作用が行われているのかというところまで分析しているものは少ない。そこで、本書では相互作用の具体的解明を目的の一つとする。

以上のことを明らかにしていくために、本書では、多面的に集団の相互作用を捉えることができるよう集団に属している全成員に調査に協力してもらった。さらに、トライアンギュレーション (①PAC分析、②各成員間における主観的発話量調査 (質問紙)、③フェイスニーズ調査 (質問紙、インタビュー)、④参与観察) を用いて、集団および集団における自己・

他者に関する解釈を得ることから、相互作用の中でフェイスおよびフェイスワークがどのような機能を果たしているのか、そのメカニズムの解明を試みることにする。

本書における調査協力者は日本語学習クラスに在籍している外国人留学生である。現在の日本語教育の世界では、日本語文法また日本語の習得に関する研究は多々なされているが、フェイスをはじめとした学習者の心理を扱った研究は稀少である。また、多くの研究が社会的属性等を固定的に捉える文化本質主義的傾向を帯びている。

多様な社会的属性および価値観が集結している日本語学習クラスには多様なフェイスワークが混在していることが予想される。ここでは各成員の意識が必ずしも社会的属性の違いに向けられていたとは限らないだろう。本書では、それら差異の意識が相互作用によって流動的に形成されるものであるという立場をとる。そのため、変数を固定的に定めた「実証主義的アプローチ」ではなく、調査協力者それぞれの自己・他者・集団に関する解釈から、相互作用におけるフェイスおよびフェイスワークの解明を試みる「解釈主義的アプローチ」を研究方法論とする。

以下、簡単に各章の紹介を行う。第1章ではフェイスに関する既存の研究のレビューを行うことにより、本書における視点および方針を定めていく。

第2章ではシンボリック相互作用論に関する既存の研究、それらの中でも特にフェイスおよびフェイスワークと関連があると考えられる「シンボル」「役割」に関わる研究を取り上げる。そして、本書におけるいくつかの着眼点を探っていくこととする。

第3章では日本語学習者および留学生に関する研究の動向をもとに、相互作用論的視点、学習者独自の解釈を取り入れた研究の必要性を説いていく。

第4章では本書が「解釈主義的アプローチ」を採用した理由およびその有用性、さらに本書におけるリサーチクエスチョンを提示する。

第5章では調査協力者、調査方法、結果と考察の提示方法について説明する。自己・他者・集団との相互作用を多角的に捉えるために、調査協力者は筆者が担当していた日本語学習クラスに在籍していた留学生全員、調査方法はトライアングュレーション（PAC分析、各成員の主観的発話量調査（質問紙）、フェイスニーズ調査（質問紙およびインタビュー）、参与観察）を採用した。

第6章は上記、調査方法に沿って実施した予備調査の結果と考察をもとに、本書における視点および方向性を示していく。

第7章は調査の結果と考察である。フェイスおよびフェイスワーク、境界意識（比較）およびその解釈、自己認識（自己評価）、シンボル形成、集団フェイスニーズ、役割形成、集団構造および各成員の位置の関わりを中心に考察を行っていく。

第8章は全体の考察を交えた上での結論を示す。そして、第9章の本書の意義および限界と今後の展望へとつながっていく。

各成員の自己・他者・集団に対する解釈の中にあらわれるフェイスワークを集団との関係、つまり相互作用との関わりから明らかにしていこうという視点は、日本語学習者という枠組みの中だけではなく、対人コミュニケーション、国際関係論など幅広い研究領域に応用できるのではないだろうか。

## 注

[1] フェイスの定義に関しては第1章第1節で述べる。

[2] ここで取り上げられている研究のほとんどがフェイスとアイデンティティを同義として扱っている。本書におけるアイデンティティの扱いに関しては第1章第2節で述べる。

- [3] Sueda (2002) は、フェイスはある程度包括的な概念であるが、文化によって現れ方およびその機能が異なっているのではないかと述べている。本書では同氏 (2002) の考えを採用し、両者の関係については深く論じないこととする。
- [4] 変数を用いてそれらの関係を客観的に説明しようとするパラダイムに基づくアプローチのことを指す。第4章参照。